

## 梶井基次郎 『檸檬』 論

——二つの「世界」の間に——

和田 えなみ

### はじめに

『檸檬』は、梶井基次郎によって、一九二五年（大正一四年）一月一日発行の、中谷孝雄、外村繁らとの同人誌『青空』一月創刊号の巻頭に掲載された短編小説である。先行研究では、主に本作は他の梶井作品と同様に、梶井自身の人生を投影した身辺心境私小説として解釈されており、「病や借金によって暗鬱とした私」に焦点が当てられている。しかし『檸檬』は、主人公「私」を取り巻く街並みなどの情景描写が多く取り入れられ、洋風化が進んだ當時を表す固有名詞も多く登場しており、時代小説のような一面がうかがえるのではないだろうか。梶井が執筆活動を行っていた時代は、プロレタリア文学運動が展開、芸術派などが登場し大衆文学が流行し始めるといった文学状況であった。文学のみならず、

十五年間の大正時代が終わり、六十四年続くことになる昭和へと移り変わろうとする激動の時代の狭間に、本作は執筆されている。登場人物が「私」一人である故に周りの環境や時代背景の描写が際立ち、最後にはその環境、いわば一つの価値観を「破壊」する本作は、他の年代に書かれた梶井の私小説作品とは相違が認められる。

本論では、梶井が本作の中で描いた「私」を取り巻く「二つの世界」の描写に焦点を当て、作中の二面性の概念を提起する。「檸檬体験」による「私」の変容を読み解き、檸檬爆発に込められた意義と、梶井が本作に描こうとしたものは何であったのか、梶井の文学作品の中での『檸檬』の役割についても考察する。

## 一 時代小説的側面

梶井基次郎の文学作品において、切り離せない点が肺結核症（以下、結核と略称する）との関係である。『檸檬』の唯一の登場人物である「私」も、肺炎カタル（肺結核の初期症状）と神経衰弱に侵されている。

幼いころから親族を結核で亡くし、中学に上がる頃には自身も病に苦しめられていた梶井の作品には、大半に背景として結核という当時の不治の病が存在している。中でも『檸檬』発表後に悪化し続ける症状の中で執筆された「冬の蠅」「のきな患者」は私小説としての梶井作品の代表作で、その闘病生活が色濃く描写されている。作中では梶井が部屋の隅で枯死する蠅に自身を重ね合わせ、回復する兆しのない自身の病に絶望する様子が描かれる。作品全体を通して頻出する「闇」の描写は、自らの病に対する絶望ととれるだろう。そして梶井が湯ヶ島での体験にもとづいて執筆したとみられる、「蒼穹」「寛の話」「冬の蠅」「闇の絵巻」の四作にわたって「闇」と向き合う様子が描かれていることから、梶井の生き方そのものに病が大きな影響を及ぼしていることがわかる。

梶井にとって「闇」すなわち自身の病との関係性は、作品内に

おける文学的表現に留まらず、自らの生き方に影響を与えた重要な存在であると考えられる。また、その存在は自らの体験にもとづいて描かれる私小説というジャンルの梶井の作品にも大きな影響を与えており、時に梶井にとって「闇」が力を与えてくれるものであったという一面を忘れてはならないとしても、少なからず梶井作品に見受けられる暗鬱とした表現や「闇（病）」の描写には、結核による将来への絶望や死への恐怖が根底にあることは確かであるといえるだろう。

しかし一方で『檸檬』は、結核そのものや病と向き合う自己を主題とした、他の梶井の私小説作品とは一線を画している。『檸檬』の主人公は肺炎カタルに侵されているが、「えたいの知れない不吉な塊」こそが主人公の鬱々とした気の最大の原因であると冒頭で明言されている。加えて他作品で主題とされた病は、本作中ではあくまで不吉な塊が「結果した」ものであるという立場をとっていることも明記されている。このことを念頭に置いたうえで着目したいのが、本作における梶井の時代世界に関する表現の多さである。登場人物が「私」一人である本作は、必然的に「私」からみた当時の世界、取り巻く周囲の環境の描写が多く描かれる。無論作中の時代は、「丸善」が寺町通りから三条通りに入ってすぐの麩屋町付近にあったこと<sup>1</sup>や、電灯や活動写真などの情報から、

大正時代と捉えることでよいだろう。その描写の中に、梶井は特に一九二〇年代前半という時代を強く意識させる表現を意図的に盛り込んでいると思われる。その最たるものは本作の舞台ともいえる京都丸善である。ここで当時の丸善の様子を理解するための引用を参照する。

明治という新しい時代を迎え、輸入販売を行う丸屋商社は創業の翌年に東京日本橋に店を開設。その翌年には大阪、翌々年には京都にと支店を設けていきます。西洋文化・文物の導入という創業の目的のもと、書籍はもちろん、万年筆、タイプライターをはじめ新しい時代にふさわしいさまざまな商品を輸入紹介、明治30年以前の商品カタログの取扱商品には、シャツ・手袋・煙草・ランプの芯・マッチ・石鹼・帽子・鉛筆・バター・ビール・リキュールなどがみられます。

（『丸善社史』一九五一年）

また、昭和四四年に発行された『学燈』「丸善・京都支店」という回では、山本修二・生島遼一らが丸善京都支店について、「日本家屋の平屋建てで、ショーウィンドーにかざってある装身具や雑貨にはどこの店にも見出せない異国的な輝きがあった」、「私は梶

井のような「気づまり」を感じて、この店を避けていた記憶はないが、学生時代のころの京都のこの店はどこか薄暗くて、この梶井の短編に美しい密度のある文章で描写されているような雰囲気はたしかにあった」、という記述を残している。新しい時代に、世界を相手にした商売を行っていたのが当時の丸善である。『丸善社史』の引用から分かる通り、丸善の変容は当時の世相を反映し、まさしく最先端の、高貴な者の憩いの場であった。

丸善は、明治二年輸入品販売を主業務とする丸屋商社として設立され、丸善の創立者である早矢仕有的は、創立の理想として、日本国民がわが国の「実情を直視し外国に対抗すべき国力を充実すべき方策」として、「日本国の商法をして独立の地位を得せしめんがために、率先して貿易に従事せん」とする決意を表明している。そしてわが国の進歩の遅れているものとして、洋書、薬品、医用機械の販売を手がけることとしたということである。『学燈』に寄せられた記述からも明らかである通り、当時の丸善に対する共通する認識として、扱うハイカラな品物や雰囲気においてその時代を先取りするような斬新さを漂わせていたのである。

大正から昭和初期にかけての日本は、産業化が急速に進み、それまで都市の一部階層で見られていた洋風の生活スタイルが一般化していく過程にあった。そのため舶来品を陳列している店も一

般にはまだ少なく、より丸善が近代的に映る場所であっただろう。日本家屋の平屋建てという外観で、その内部には異国情緒を感じさせる品物を取り揃えていたという点も、和風から洋風への変化、時代の移り変わり半ばという二面性を感じさせる。また、作中では以前の私が好きであったものとして、丸善に並んでいた商品について列挙されている点も印象的だ。オードロンやオードキニンといった商品名、また作中のいたるところにゴルゴンの鬼面、カリフォルニア、ヴオリウムといったカタカナが登場する。異質とも感じられるそれらの表現も、カタカナで英語を意識することによって、外国の文化が流入してきた当時の時代背景を読者に暗示させるねらいを果たしているのではないだろうか。

最後に注目したいのが本作の末文に登場する活動写真である。そもそも活動写真とは、現在の映画の旧称であり、源流である「キネトスコープ」が明治後半から流行し始め、大衆娯楽として「活動写真」の名が一般に定着した。大正時代における常設民衆娯楽施設の入場者数を調査すると、芝居や寄席といった娯楽の中でも活動写真の入場者数は群を抜いており、大衆娯楽の中心的存在となっていたことが分かる。このように、大正時代を象徴するといえるモノや風潮が作中随所に盛り込まれていることから、時代小説的な側面を本作に見出すことができるのではないだろうか。

時代小説とは、大百科事典における定義によると、「実在の人物、史実に沿って話が進む歴史小説とは異なり、過去の時代背景を用いて、架空あるいは史実通りではない人物の活動を描く」ものであるとされている。通常時代小説に判別されるものは時代区分が江戸時代であることや、文体の違いなどは歴然であるが、「時代背景を意図的に読者に感じさせ、それが作品自体において何かしらの意義を持つている」という特徴においては時代小説と同一であるといえる。本作が書かれた年代を考えても、一九二四年という時代の変わり目に梶井があえてそれを感じさせる表現を用いることに意義をこめたことは明白である。

一九二〇年代は急速に洋風化が進み、日本国内で生活様式も流行も、それらに伴って街並みなども、大きく変化を遂げた年であった。目に見える世界が大きく変化しながら、新しい昭和という時代が準備されていく日々は、さぞかし人々に目まぐるしさを感じさせただろう。その急速な変化は、当時の若者たちに「えたいのしれない」漠然とした不安を抱かせるには充分であった。「私」の病として作品冒頭に登場する神経衰弱も、その一端である。神経衰弱は明治時代後半から流行し始め、文明開化以来急速に変化する日本の現状と併せて、近代人の病として考えられていた。その流行は、当時のメディアや新聞に端的に表れており、読売新聞や

朝日新聞などで神経衰弱に関する新聞連載も行われるほどであった。神経衰弱における症状をいくつか確認すると、食欲不振や睡眠不足など身体的なものから、「悲哀に沈みやすく憂鬱に陥りやすい」「強迫観念」といった精神的な症状が確認できる。<sup>(3)</sup>つまり大正時代の大衆における「神経衰弱」のイメージは、かなり浸透した共通の病理感覚であったといえる。随所に散りばめられた時代描写は、梶井がこの共通の病理感覚を利用した、新時代と今の間を生きる人々の目まぐるしさと、何とない倦怠感を作中に据え置くレトリックと捉えられるのではないか。

## 二 美的表現の特質

次に梶井特有の美的表現について考察する。本作には京都の街並みや「私」の嗜好に関する色彩や情景描写が多く見受けられる。梶井が展開した美的表現に対して考察を深めることは、後述する「檸檬爆破」の意味を論ずる上で必要不可欠であると考ええる。

梶井の美的描写の中でも、特に目を引くのはなんといつても色彩についての描写だろう。見すばらしい裏通りの中にも、突如として「びっくりさせるような向日葵」や「カンナが咲いていた」<sup>(4)</sup>として、それらの花の持つ明るい色彩が読者である我々に鮮やかなイメージを脳裏に想起させる。梶井は文学だけでなく、芸術や西

洋美術に造詣が深かったことは周知であり、それは作中の「私」がかつて画本を愛していたことやアングルの画集が登場すること、また「瀬山の話」で使用した瀬山極というペンネームは、ポール・セザンヌの名前をもじったものであるという事柄からも明らかである。

作中には大別して二つの美の価値観が描かれている。「不吉な塊」に蝕まれる以前の私が好きだった美」と「現在の私が心惹かれる美」である。その二つの美が対比されながら、「私」は以前好きだった美しい音楽や詩の一小節を受け入れることができなくなり、街を浮浪するようになったと語られる。

「不吉な塊」に付き纏われながら街を浮浪する中で、「私」を束の間癒し慰めてくれる後者の美に類されるものが、「見すばらしくて美しいもの」なのである。前者の美との明白な違いは、「美しい」とは相反する「見すばらしい」ものなのに「美しい」という点だろう。とりわけ「私」を魅了したのは、「夜」の果物屋であった。夜になると廂の下っている果物屋は真暗く、店頭に点けられた電燈が一層絢爛に果物に浴びせかかるのだ。その果物屋の眺めにしても、「私」が惹かれているのは華美な装飾などではなく、闇と光と色彩の絶妙な合わさり、幽玄的ともいえる美しさを生み出している点であり、やはりこれも、素朴で明澄な美に属していると

言えるだろう。

それでは「私」が現在否定的に捉えている「以前の私が好きだった美」とはどのような美であろうか。「私」の生活がくずれる以前、「私」が好きだったところは、丸善であった。しゃれていて豪華絢爛、人目をひくような派手なものである。鑑賞するために人為的に造られた音楽や画集を、かつての「私」は皆と同じように好んでいた。「不吉な塊」におさえつけられるようになってから、それらにいたたまれなくなつたのは、生活水準の違いや金銭的な貧しさからだけではないと考える。「不吉な塊」によって暗鬱とした心を、少しでも慰めるものを探しながら街を転々として、神経がすり減つた状態の「私」にとつて、「丸善的な美」はあまりにも人為的で、完璧すぎたのではないか。増田氏の言葉を借りれば、「資本主義的虚飾」と表すことができる。<sup>(4)</sup> 増田氏は同論の中で、「丸善的な美」について『檸檬』に潜む時代的意味から考えて「近代日本の唐突な成長と海外風潮による資本主義的虚飾、文化的浅薄さ・虚偽」といえるべきものであると定義づけている。一見は派手ではしゃれたものであつても、内実は空虚であり、現在の「私」にとつてその価値が混濁して見えたのだろう。

このように作中には二つの美的価値観が対比される構造で存在している。ここからはこの対比構造から二つの価値観をもつ「私」

の二面性について読み解いていきたい。

第一章では作中の時代が大正から昭和に移り変わる二つの時代の要素を持つことや、二章の第二節では「私」の二つの異なる価値観の存在について考察してきた。このように本作には対になる二つのものや対比構造が多く見受けられる。本節では作中の対比構造を読み解き、「私」の二面性について考察していきたい。

前述した「見すばらしくて美しいもの」を好むという美的価値観をもつ現在の「私」は、「えたいの知れない不吉な塊」によって街を放浪する際に、しばしば錯覚を楽しむ。以下が該当箇所本文の引用である。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのよ  
うな市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起こそうと  
努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知  
らないような市へ行ってしまうか。第一に安静。がら  
んとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂のいい蚊帳と糊のよ  
くきいた浴衣。希わくはここがいつの間にかその市になつて  
いるのだ。——錯覚がようやく成功しはじめると私は

それからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

「私」は錯覚の世界を構築するうえで、安静を望み、清潔な場所への逃避を願っている。「清浄な蒲団」「匂いのいい蚊帳と糊のきいた浴衣」などは清潔なモノであるが、実際の「私」は、京都の裏通りの壊れかかった街を歩いている。この現実と願望の空間世界の大きなギャップこそが、錯覚を引き起こすことに成功する条件なのである。だからこそ「私」は裏通りの「見すばらしい」情緒を好んだ。錯覚を楽しむ行為は、空間のギャップをトリガーとして、その矛盾の間に錯覚世界を作り上げ、そこに自身の意識を投影することで現実との境界線を曖昧にすることを楽しむ、現実世界の居場所を探す「私」の一種の逃避方法であるといえる。しかし、「旅館の一室」と今「私」が存在する京都の裏通りは空間世界としては全く異なるように感じるが、本質的には同じ美的特徴をもっていると考えられる。どちらも人にとって身近で素朴であり、明澄明快である。そしてこの素朴さ、明快さは、梶井が特に憧憬していた世界であったのである。飲酒、放蕩、学業放棄、借金という混乱の中にあつたころの梶井が、それゆえに、逆に素朴

さ、単純さに心惹かれ、その矛盾は『檸檬』内の「私」にも投影されており、「見すばらしくて美しいもの」を好んだ理由であるといえるのではないか。しかしその憧れと現実の自分の矛盾に苦しみ、錯覚の間で現実の「私」を見失うのを楽しむ。「私」はその繰り返しから抜け出せずに街から街を浮浪しているのだ。

梶井が自身の「矛盾」について苦悩を抱えている様子は、再び別作品である『檸檬』以前に執筆された習作『彷徨』に強く見受けられることができる。この作品は梶井の草稿群の二十四篇の内の一つで、大正十二年の作品である。執筆時期としては『檸檬』成立の二年程前ということになるが、同じく習作の一つで『檸檬』の前身であるといわれる『秘やかな楽しみ』と『瀬山の話』の間に書かれた作品でありほぼ同時期の梶井の状況や思想が反映されていると考えることができる。特にこの『彷徨』を参照したいのは、淫蕩な生活に身を沈めながらも「健康で晴朗な空気に憧がれ」彷徨している『檸檬』の「私」に類似する、梶井の苦悩が鮮烈に描かれている点からである。当時の梶井が自身の内の矛盾をどのように自覚し、苦悩していたかが理解できる。「一體どうして俺はこんなによくぞなんだろう。——」という吐露の言葉から始まる本作は、以下に引用する通り、「やりきれない」感情の眩きの連続である。

「魚が水の中に生活しなければならぬ様に、俺にはこの生活が必要なんだらうか。この淫蕩な懶惰な不健全な生活が。」

「地道の生活が俺にはどんなに慕はしいだらう。然し地道の生活に身を置くと俺は死んでしまふ様な気がする。」

「この生活は生存競争には不適當だ。いつでも同じ落とし穴にひっつかかつてゐる馬鹿な猪だ。こんな性格を持つてゐる位なら死んだ方が勝しじゃないか。俺はいつでも何かに苦しめられている。嫌だ嫌だと思つてゐる。晴朗な気持ち。すつきりした気持ちが恋しい。(略) ぷつと突き抜けた、何のわだかまりもない生活。あゝそれが欲しい。欲しい。それを思ふと泣き度くなる。あゝそんな生活がしてみたい。」<sup>(5)</sup>

「晴朗な生活」に憧れる梶井の苦悩がよく表れている箇所を一部抜粋してみたが、『彷徨』からはそんな「地道で、健全な生活」ある種「普通の生活」ともいえる生活に憧れを持ちながらも、自堕落な放蕩生活の魅力にも甘んじてしまう自己の矛盾する性格に嫌気がさしている様子がうかがえる。ここに描かれている憧れこそが当時の梶井が抱えていた、自分ではどうすることもできない、自己の中に存在する矛盾なのだ。『彷徨』は当時の梶井の持つてい

た二面性を認識するうえで非常に重要であるが、その認識を念頭に置いたうえで、当時の梶井の自己嫌悪に関して論じた富田氏の論<sup>(6)</sup>があるのでそれを参照したい。富田氏は梶井の自己嫌悪を読み取る根拠として大正十二年に書かれた習作『矛盾の様な真実』を取り上げており、以下本文の引用である。

『矛盾の様な真実』は、作者、即ち梶井が常日頃嫌っているものの中に自己の姿を発見しなければならなかったことへの嫌悪にも似た述懐で充たされている。例えば嘘をついている弟の中に「私自身はこれでかなりの嘘言家なのである。そして虚栄家の素質も充分持つてゐる。私は自分の卑しい所、醜い所、弱い所を隠すためによく嘘を云った―」（『矛盾の様な真実』より）といった自分を思い出させられるが故に弟を嫌った。梶井が自己のその様な性格が〈忌々しくてならない〉時、弟の嘘は梶井自身触れたくない急所をまざまざと見せつけており、しかもその上に〈醜く拡大した私自身のポンチ絵を見せつけられる様な侮辱〉を感じさせたのである。このような自己嫌悪が矛盾で埋め尽くされていた梶井の当時の生活の基調を成していたといえる。



この論で展開されるこの頃の梶井の自己嫌悪的感情を見る限り、梶井が『彷徨』に表されたような自己の矛盾を受け入れることができていると推察できる。そしてその点こそが、本作でほんやりとした倦怠を感じさせながらも明確には言及されない「私」の暗鬱の正体なのであると考える。つまり、冒頭から「私」の心を始終おさえつけていた「えたいの知れない不吉な塊」というのは、肺炎カタルや神経衰弱などの疾病でも借金でもなく、また時代的混乱でもない、「それらすべての矛盾を内包した実存する生への不安」なのではないか。時代的混乱や病の要素が全くの無関係であるとは言い難い。しかしどれも直接的なそれではなく、言ってしまえば「私」の中の矛盾を作り出す要因の一つでしかないのである。多用される対比表現は「私」を取り巻く事象の二面性を表し、それらは、もともと「私」の中にあつた「私」自身の願望と現実世界の自身の矛盾と相まって、さらに「私」を不安定にさせた。その不安定さが「実存する生への不安」であり、「えたいの知れない不吉な塊」であり、矛盾を抱える自己の〈落としどころ〉を探して、「私」を浮浪させている正体であると考ええる。富田氏は『檸檬』内の「私」がもつ二面性について「二つの自我」と定義して、それを「梶井の文学の主題である〈闇と光〉の底を流れる主導調」であるという論を述べているが、それは概ね首肯できようであろう。

### 三 檸檬爆破の衝撃力

最終章では作品後半部の考察へと移る。「私」が例の果物屋で檸檬を手にしてから、檸檬を丸善に置いて出ていき、爆弾に見立てた想像をしながら街を歩いていく——という最終局面において、檸檬爆破の意味と、梶井が作品内で提示した「私」越しの「二つの世界」の意義を明らかにしていきたい。

作品の後半部は、本作の象徴たる「私」の「檸檬体験」が鮮烈に描かれている。きつかけは珍しく例の果物屋の店頭で檸檬が出ていたことである。「檸檬など極くありふれてゐる」という檸檬が、なぜこの店に珍しいものであつたかは、当時の雑誌や新聞を参照してみるとよくわかる。

昭和三年に発行された雑誌「農業世界」によると、大正十三年から昭和三年までの国内においては、北米欧州からの輸入果実としてレモンが大いに人気を博しており、国内産のレモンの倍以上の値段がつけられる高級果物であつたという。アメリカ産のレモンがどれほどの値段であつたかという点、大正八年の「読売新聞」朝刊に、「けふ此の頃の珍しい果物 内地ものと外国もの」という題で「アメリカ産のレモンが一個十五銭から十八銭で味も極めて宜しいそうです」と紹介されている。当時大正九年にかけそばが

一杯およそ九銭であったこと<sup>(8)</sup>から、当時の輸入レモンが庶民の食の値段よりも高かったことが分かる。多少の価格の変化はあるにしても、カリフォルニア産の檸檬がいかに「あたりまへの」果物屋においては珍しく感じられたかが理解できるだろう。

梶井はその果物を結局買うことにするのだが、この時点では檸檬はそれほど特別な存在としては描かれていない。しかしここにあげられる「単純な」色と変哲のないすつきりとした「紡錘形の恰好」という描写から、先に挙げた「見すばらしくて美しいもの」に共通する美しさを「私」が檸檬に感じていたであろう点は認識しておきたい。そしてその檸檬を手にしてからの「私」の心情は五感を通して快感を得、街の上で非常に幸福な気持ちに変わる。檸檬の視覚的な色彩や形に加え、檸檬を手にとるとその冷たさ、匂いが「私」に触覚や嗅覚を通して衝撃を与え、たった一つの檸檬が主人公の心にも働きかけている様子が分かる。それは単なる癒しではなく、生気の塊であるかの如く「私」の身体を「元気に目覚め」させたのである。

檸檬を自身の五感を通して体験したことで、「生活がまだ蝕まれてゐなかつた以前」の健康な身体と幸福な気持ちを、「私」は一瞬間取り戻すことに成功している。最初に檸檬に惹かれたのは視覚的な色彩が大きな原因であったのに、後に感じた冷覚や嗅覚を先

に挙げ、視覚が最後にきていることから、自身の五感で檸檬を感じることに伴って〈生〉の幸福の感覚を取り戻すことができていることがわかる。この「檸檬体験」によつて「私」がずっと悩まされていた「不吉な塊」による憂鬱までもが紛らわされていく。先行研究にこの局面の「レモン体験」が病を生きる「私」にとつて身体的にも精神的にも健康な〈生〉を回復し得て、すでに憂鬱から解き放たれていると提示し、その後の丸善での一連の流れは「レモン体験」の反復に過ぎないと述べている村山氏の論がある。その論の中で氏は「レモン体験」こそが最も重要な価値を持つている出来事である」と定義づけているが、それは不十分であると考える。「私」が完全な「不吉な塊」からの脱却を実現するにはこの後の丸善における体験が必要不可欠なのである。

檸檬を手にした「私」はすっかり幸福な気持ちで「軽やかな昂奮に弾んで」往来を歩き、最後に丸善の前にやってくる。生活がくずれてからは平常あんなに避けていた丸善に、檸檬の昂奮を得た状態の「私」はその時「やすやすと入れるように思えた」のであるが、入ってみると「私」の心を充たしていた幸福な感情はみるみる逃げて行ってしまい、「私」に再び憂鬱がのしかかる。それを感じながらも「私」は画本の棚の前行き、以前好きだった画集を一冊ずつ抜き出して開けてはみるのだが、気持ちは逸らず、そ

れどころか「しきりに何かに追われてい」た、檸檬を手にする前の「私」に戻ってしまう。どうしようもなく本の群を眺めていると、ふと「私」にあるアイデアが起こる。「あ、そうだそうだ」「本の色彩をゴチャゴチャに積み上げて、一度この檸檬で試してみたら」。

今現在再び「私」を憂鬱にさせた画集を、好きなように積み上げて、その上に先ほど憂鬱を忘れさせてくれた「檸檬」を据えつける。袂にある檸檬の存在を思い出し、このアイデアが頭に浮かんだ瞬間「私」は再び軽やかな昂奮を取り戻している。この場面で一つの矛盾、「私」の中に存在する二つの美の価値観に関する矛盾が解消される。

以前「私」が愛した画集は無論二章でいうところの「丸善的な美」をもつものである。対して檸檬は、極くありふれたもので、偶然果物屋でその色彩とヴォリウムに「素朴で単純な美」を見出した、今の私が好むものである。「私」はまず、「丸善的な美」の暗喩である画集を納得のいくように積み上げる。ここでまた色彩についての描写が出てくるが、色彩美を好む「私」が、「丸善的な美」を「赤くなったり青くなったり」させながら自分の好きな色彩に造り変えることによつて、今の「私」が好む「素朴で単純な美」との融合に向けて近づけている行為であると考ええる。そうして納得のいく城を作り上げ、その上に檸檬を据えると、「ガチャガチャ

した色の諧調」が、檸檬の色彩の中に、紡錘形の身体の中に、ひっそりと「吸収」されてしまったのだ。

この「吸収」が意味するものは非常に重要であると考ええる。これは外面的には派手で華美であるが、その実は空虚であるため混濁して見えていた丸善的な美しさを、単純素朴な美しさの象徴である檸檬が呑み込んでしまう構図である。そしてこの二つの美の融合の構図は、「私」の中に対立していた二つの美的価値観、以前愛せていたものが愛せなくなったという矛盾をも融かす構図となっているのではないだろうか。「吸収」という形をとることで、どちらの存在も壊れることなくそこには在り、寧ろ緊張感を増してカーンと冴えかえった檸檬に、「私」は「矛盾する二つのものの共存」を見たのである。

そこで不意に「私」に第二のアイデアが起こった。「―それをそのままにしておいて私は、なにくわぬ顔をして外へ出る。―」「私」はそのアイデアを実行し丸善を後にする。

変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなにおもしろいだろう。私はこの想

像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も粉葉みじんだろう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下って行った。

これは「私」が画集と檸檬の城を放置したまま、丸善を後にしてから物語の末文までの引用である。いわゆる「檸檬爆弾」の発想である。この檸檬を爆弾に見立てた爆発の想像は、一体何を意味するものなのか。結論から述べてしまえば筆者はこれを、「私」による二面性の受容」であると定義した。第一のアイデアの結果、「私」は檸檬の中に対立する二つのものの共存を見、「不吉な塊」の根源であると述べてきた「自己を取り巻く矛盾」の一つが解決される場面に立ち会っているのである。その矛盾の共存の中に、今まで自己の二面性に苦悩していた「私」が、その二面性のあり方によくやく〈落としどころ〉を見つけているのだ。それはまさに檸檬の「吸収」にみた「共存」であり、「二面性」が存在しても良い、その二面性による矛盾や齟齬に、憂鬱や焦燥を感じなくても良いのだという「私」が全ての二面性を受容した瞬間であった。そしてそれこそが、最初に檸檬を手にしたときに感じた身体的感覚による幸福と合わさって対になる、真の「檸檬体験」の意義である。

と考える。「爆発」の意義については、村山氏が「梶井基次郎『檸檬』論」の中で、「私」が檸檬を放棄することができたのは、何よりも「檸檬体験」の手応えを強く実感できていたからであると述べ、さらに放棄した後爆発（想像上に過ぎないが）を迎えることで、その実感を「私」が永久保存的なものとしたのであるという論を展開しているが、筆者もこれに賛同したい。いわば爆発という形の破壊をもって「私」は自分の実感を確固たるものにするのである。つまり最初の「檸檬体験」で身体的に健康な感覚を得、丸善内での画集と檸檬の融合による「矛盾の共存」の気づき、丸善を出たのち「檸檬を爆弾に見立てた想像」の行為によって自己の二面性を受容し、その実感を永久に保存する三つの段階を経て、「私」が変容していくことが一連の「檸檬体験」の意義であると考察する。

最後に『檸檬』と習作『瀬山の話』の違いに言及し、梶井が作中で描いた二面性についての考察を深めたい。『瀬山の話』はそもそも『檸檬』の前身となった作品であることは既に述べたが、一七ページの短編である『檸檬』に対して、『瀬山の話』は六三ページと三倍近くもあるのである。梶井は不必要だと思われる部分を削りに削って、「檸檬体験」を際立たせるように必要なものだけを凝縮したのである。

作品全体として暗く低調な気分を多く表現した『瀬山の話』に対し、『檸檬』は全体的に明るい色に塗り替えられていると考えられる。果物屋の紹介を「私」がする場面においても、『檸檬』は具體的に「人参葉の美しさ」「水に漬けてある豆だとか慈姑」と挙げられているが、人参は長くあおおとした葉を持つ特有のものであるし、水に漬けてある豆や慈姑は、舞台である京都においては「必ず芽が出る」ということでおせち料理にも用いられる縁起物として主流である。

このように随所に明るい印象に塗り替えられた形跡の見える『檸檬』だが、それは梶井が『檸檬』という作品を、自身の中でプラスのイメージを持ったものとして描こうとした表れであると解釈できる。梶井は二十四篇の習作を描いた大正十一年から十四年の間、『檸檬』にも描かれる自らの二面性について悩まされてきた。しかし、その二面性の共存を認め、自己を受け入れた時、その二面性は梶井文学の主題であるとされる「闇と光の関係性」へと姿を変える。『檸檬』はそんな梶井の文学主題の底を流れる、初めの契機を形作つたといえる作品であったのではないだろうか。<sup>(9)</sup>

また、佐藤氏は梶井の闇との関係性について、病という宿命を背負い続けた梶井の人生は、よくもわるくも闇と光に生かされた道のりであったと述べており、梶井が「闇」から受ける影響が安

息であろうと絶望であろうと、「闇」が梶井に与えていたのは、決して無意味な死ではなく、「空虚なものではなく心を動かす力」をもった「闇」であったとその関係性を定義している。『檸檬』では大正と昭和の二つの時代の間、変化する自己の価値観の間、自己の願望世界と現実世界の間といったあらゆる二面性の〈間〉に彷徨う「私」が、『檸檬』を通して再び生への執着を見出し始め、新しい価値観をもって次の世界へと進む様子を描くことが最大の目的であったのではないかと結論づけたい。

注(1) 国際日本文化研究センター所蔵の「京都市街全図」大正二年七月一日大阪毎日新聞社発行に京都丸善の位置が記されている。

(2) 権田保之介『民衆娯楽問題』(一九七四年・文和書房)

(3) 読売新聞による連載「神経の衛生」の「(二)」(明治三十九年六月一〇日)にて医学士の田村化三郎氏が神経衰弱について解説している。

(4) 増田修氏は、「梶井基次郎『檸檬』小論―えたいの知れない不吉な塊をめぐって―」の中で「以前「私」が好んだ美」いわば「丸善的な美」についてこのように定義している。(一九八〇年『日本文学』第二九卷四号・日本文学協会)

(5) 『梶井基次郎全集』第一卷(一九九九年 筑摩書房)

(6) 富田直子「梶井基次郎小論「檸檬」以前と「檸檬」の成立について」(一九六六年『中央大学国文』九卷・中央大学国文学会)

(7) 注6と同じ

- (8) 『値段史年表 明治・大正・昭和』(一九八八年・朝日新聞社)
- (9) 注7に参照した富田氏の論を参考としている。

引用・参考文献

- ・梶井基次郎『檸檬』青空文庫 [https://www.aozora.gr.jp/cards/000074/files/424\\_19826.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000074/files/424_19826.html)
- ・梶井基次郎『檸檬』(二〇一三年・角川文庫)
- ・『梶井基次郎全集 第三卷〈書簡〉』(二〇〇〇年・筑摩書房)
- ・市川浩昭「交錯する〈くだもの〉その相貌：芥川龍之介『蜜柑』・梶井基次郎『檸檬』・中勘助『きんかん』をめぐって」(一九九五年『三郎山論集』第二卷・上田女子短期大学日本語教育研究会)
- ・大塚常樹「梶井基次郎・『檸檬』の言語戦略―えたいの知れた吉な塊がえたいの知れない不吉な塊を破壊する話―」(二〇一六年『国語と国文学』九十三巻・明治書院)
- ・佐藤憲昭「梶井基次郎研究―〈闇〉との関係性から探る生き方の形成と変化―」(二〇一七年『上越教育大学国語研究』三一号・上越教育大学教育学会)
- ・中沢弥「梶井基次郎と表現主義」(一九九三年『日本文学』四十二巻第九号・日本文学協会)
- ・村山麗「梶井基次郎『檸檬』論―病を生きる「私」(二〇一八年『上智大学国文学論集』五一号・上智大学国文学会)
- ・<https://www.kyototuu.jp/Life/VegetableKuwai.html>「京都通百科事典」

(二〇二〇年度卒業)